五島慶太もう一つの顔 ①

五島育英会前顧問　國分　榮

古希の慶太翁

M&Aを繰り返し、壮大な事業構想を実現に導く豪快な手腕から、(五島ならぬ)「強盗」慶太の異名をとった敏腕実業家をご存じだろうか。

「西の小林（注一）、東の五島」と称され、東急電鉄と今の東急グループを創設した五島慶太は、１８８２年に長野県の青木村で誕生した。

没後60年にあたる今年、青木村でもさまざまな顕彰事業が行われているが、今回紙面で、五島慶太の事業家としての功績に加え、意外に知られざる教育者としての一面を紹介していきたい。

田中角栄が総裁にしたかった男

２０１９年１月18日、青木村は、東京都市大学（東京都世田谷区）と包括連携協定を締結した。調印式には、青木村から北村政夫村長、東京都市大学から三木千壽学長らが出席した。東京都市大学グループは、長野県に所在する塩尻高校に加え、東京に幼小中高などを併設し、学校法人五島育英会が運営する。その初代理事長を務めたのが五島慶太である。青木村と同大は、これまでも五島慶太翁生家の実測、復元模型制作プロジェクトなどの取り組みを通して交流を深めてきたが、本協定の締結により、人材育成、地域づくり、産業振興などの分野でさらに連携して取り組むパートナーとなった次第である。

調印式にて北村村長（左）と三木学長

慶太は稀代の実業家で、そのスケールと行動力は並外れている。１９２２年、「目黒蒲田電鉄」（現・東京急行電鉄）設立に始まり、今や２０社８法人で構成される東急グループの創設者である。ターミナル駅であった渋谷駅に関東初の電鉄系デパートである東横百貨店（現・東急百貨店）を開業するなど、沿線の付加価値を高めることに尽力。交通事業のみならず不動産事業、生活サービス事業、ホテル・リゾート事業と幅広く展開させ、小さな鉄道会社から一大グループへと成長させた。さらに、教育事業にも熱心に取り組んだ慶太は、東京工業大学、慶応義塾大学、東京都立大学（首都大学東京）、東京学芸大学など他法人の経営する大学を数多く東急沿線に誘致し、文教都市を作り上げた。こうして「鉄道王」と呼ばれた慶太だが、後に１９４４年、東條英機内閣の運輸通信大臣に就任し、名古屋駅の交通緩和や船員の待遇改善などにも貢献したことはあまり知られていない。

元総理田中角栄氏は、衆議院議員当時、慶太の人物像についてこう述懐した。「とにかく偉い人だった。政治家の中にも、総裁にしたい、という人がタマにいるが、オヤジのような人こそ、総裁にしてみたい、とつくづく思いましたね」。「オヤジから代議士には面白い奴がいないが、お前さんは面白い。月に１回は会おうとなった。そのうちに、君、代議士をやめて事業をやってはどうかとおっしゃる。そこで私は、金もうけは私もやったことがあり、そう下手なほうだとは思わない。しかし、いま政治家をやめるわけにもいきませんとお答えしたら、五島さんは笑いながらそこを思いきってやめれば、大物になるんだがな」「上杉謙信と武田信玄を合わせて割ったような人だった。政治家と実業家の取り組みでは、とかく頼まれごとがつきものだが、オヤジは、あれをやってくれ、これをこうしてくれ、などということは、とうとう一度もなかった」（注二）。

注一・阪急電鉄の創設者である小林一三氏

注二・『五島慶太の追想』（東急電鉄株式会社編）衆議院議員田中角栄氏が寄稿

▽執筆者プロフィール

國分榮（71）。川崎市在住。五島育英会法人事務局長や顧問など歴任。

五島慶太翁生誕130年記念編纂委員長として「熱誠」を刊行、創設者慶太翁の講演会を行い自校教育に情熱を注ぐ。

ご購読申し込みは●読売センター小諸TEL０２６７(４１)６３５５●読売田中・滋野サービスセンターTEL０２６８(６４)２３６２か東信ジャーナル社へ

五島慶太もう一つの顔 ②

五島育英会前顧問　國分　榮

慶應移転から約30年後の日吉駅（1963年）

東急沿線を慶應誘致で文教都市へ

慶太は数多くの大学を東急沿線に誘致して文教都市を作り上げた。なかでも圧巻なのは、1929年の慶應義塾大学日吉台への誘致だ。

慶應はその2年前、大学予科を郊外に移転することを決定していた。慶太は、沿線への慶應誘致こそが鉄道事業の発展や街づくりにおける大きな先行投資と確信し、日吉台にある7万2000坪に及ぶ広大な所有地を無償提供すると申し出た。地価が坪10円の時代に72万円を慶應に寄付する形である。その年の東横電鉄（現・東京急行電鉄）の運賃の年間収入は総額51万円。それをはるかに凌ぐ莫大な資金を投入しての誘致だ。当時、昭和恐慌の煽りを受け、傾きかけていた会社の存亡をかけた大勝負である。

慶應は誘致の条件として、さらに3万2000坪を地主から買収することによる計10万坪に上る広大な土地を要求した。また、その買収価格は時価の半分しかだせないという。社内では猛反発があった。

鉄道事業としては、花街を誘致すれば手っ取り早くそこそこの収益は上げられるという時代ながら、慶太には、東急沿線を文教都市にしたいという強い思いもあった。その裏では鉄道各社による誘致合戦があった。西武が小金井の土地を、小田急も相模原の土地をそれぞれ10万坪提供すると名乗り出ていた。会社の命運をかけた慶太の決断で勝利を収めた結果、東横線はやがてじわりじわりと乗客数を伸ばしていく。開業当時の日吉駅周辺は一面のサツマイモ畑で乗降客もほとんどいなかったというが現在、一日乗降客数15万人を超える東横線の要衝へと飛躍的な発展を遂げた。

このほか、関東大震災で被災した東京工業大学をはじめ、東京都立大学（首都大学東京）、東京学芸大学など数々の大学誘致も実現させ、慶太の類まれな慧眼により、東急沿線は文教都市としての付加価値を高めることに成功した。晩年、慶太自身もこうした街の発展を大いに誇りにしていたという。

慶應義塾大学元塾長奥井復太郎氏は、慶太の貢献について次のように語っている。

「慶應義塾は大正9年大学令に準拠して三田に文科系学部を置き、四谷に医学部を新設しましたが、何分にも土地が狭かったので大正15年ころから別に敷地を設けて一大学園をつくる計画が進められました。将来のためにはどうしても用地として10数万坪を必要としましたが、なかなか決定には至らなかった。「義塾の学園建設計画は五島氏の土地寄付によりはじめて軌道に乗りました」「戦後も、五島氏は戦災によって荒れた日吉整備のために費用を出したり、体育施設に寄付されたり、また義塾の創立百周年記念の募金計画には賛助金として支配下の会社名義で約3000万円の寄付をなされました」（注）。

注・五島育英会報追悼号（五島育英会編）慶應義塾長奥井復太郎氏が寄稿

ご購読申し込みは●読売センター小諸TEL0267(41)6355●読売田中・滋野サービスセンターTEL0268(64)2362か東信ジャーナル社へ

五島慶太もう一つの顔 ③

五島育英会前顧問　國分　榮

慶太は東急沿線に多くの学校誘致をおこなう一方、経営難の学校にも数多くの援助の手を差しのべ、経営まで引き受けた。武蔵工業大学（現・東京都市大学）もその一つである。慶太は本業の鉄道事業経営の激務のさなか、どんな経緯で理事長の責務を引き受け、どのように再建していったのか。慶太の教育にかける情熱の物語を、2回にわたり、深く掘り下げてみる。

五反田時代の仮校舎

貧窮の武蔵工業大学の経営を引き受ける

武蔵工業大学前身、武蔵高等工科学校の創立の動機は少々変わっている。1929年5月頃。東京大森の「東京高等工商学校（芝浦工業大学の前身）」は、その多くが町工場で働きながら実験や実習で腕を磨きたいと、昼間部や夜間部に通っていた若者たちだった。しかし、当時は時間割が不規則で、休講が多いなど授業内容に不満を感じており、改善を求めて学校と話し合いをもったが不調に終わる。学生ストライキを率いた10名の「放校処分」を受け、大勢の生徒たちが退学届を出す事態になった。学校を辞めて路頭に迷った生徒たちは、非常勤講師の慶應義塾大学法学部教授及川恒忠氏に、「安心して勉学ができる学び舎を造ってほしい」と懇願。及川家の門前に10人くらいの生徒が入れ替わり座り込みをした。及川氏は彼らの熱い情熱と高い向学心に心を動かされ、慶應卒業生の西村有作氏と手塚猛昌氏に協力を求め、この三人を創立者としてついに開校に至る。

しかし、当時は関東大震災の復興途中であった昭和初期、金融恐慌が起こるなど、社会も経済も混乱期にあった。先生・生徒らも協力して、やっとの思いで見つけた仮校舎は、池上電気鉄道（現・東京急行電鉄）の開通によって東西に分断された工場跡地で、長い間空き家の廃屋だった。雨が降ると教室も廊下も浸水し、しばしば休校となった。

当時、目黒蒲田電鉄（現・東京急行電鉄）の専務であった慶太は、この五反田校舎の劣悪な事情を知り、大岡山に移転を勧めた。慶太は、大岡山駅の隣接地約1500坪の同社所有地を学校に貸すにとどまらず、校舎新築資金の一部も寄付。校舎等の工事は電鉄が行い、隣地500坪も貸与して講堂や実験棟を作るなど、慶太は協力を惜しまなかった。

生徒は年々増加し、600名を超え、移転6年目で早くも教室が飽和状態になっていた。そこで、広い敷地への移転と同時に、専門学校への転身を目指すことになる。当時、専門学校は、在学期間の生徒の兵役が免除されるなど生徒募集がしやすかった。現在の世田谷キャンパスへの移転である。しかし、資金のない学校は地主たちの信用が全くなく、慶太は、自ら20名を超える地主たちに働きかけ、電鉄が地主から一括借り受け、学校に転貸する策を講じた。こうして慶太の援助により専門学校への昇格を遂げる。

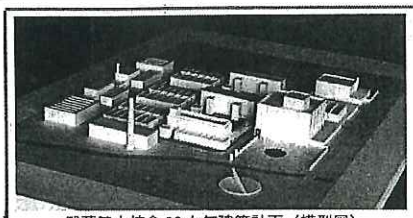
さらに、戦後の学校制度の改革により、やがて同校は武蔵工業大学へと生まれ変わるが、相変わらず財政上は火の車だった。戦後のインフレが激化する当時、学生は思うように集まらない。また、建物のほとんどが大岡山から移築した木造校舎だが、教室の破れ窓を修理する費用もない状況であった。当時武蔵工業大学教授で、後に東横学園女子短期大学（現・東京都市大学）学長を務めた英修道氏は、「校舎のあちこちの雨漏りで傘を差して授業をした、給料も遅配して、先生方は大変困っていた」と当時の大学の窮状ぶりを述べている。

その一方、大学認可時の文部省との約束もあり、武蔵工大は教授陣容や施設設備の拡充を迫られた。武蔵工大理事長の西村有作氏は、財政危機に瀕した大学の発展には、教育に理解ある実業家の協力が不可欠だと痛感し、東横学園理事長の五島慶太に、大学経営の継承を依頼する。慶太はこれを受諾し、幼稚園から大学に至る総合学園の経営を決意。武蔵工大と東横学園の両法人を合併して法人名を五島育英会と改め、慶太は自ら初代理事長に就任したのである。

ご購読申し込みは●読売センター小諸TEL0267(41)6355●読売田中・滋野サービスセンターTEL0268(64)2362か東信ジャーナル社へ

五島慶太もう一つの顔 ④

五島育英会前顧問　國分　榮



武蔵工大校舎10か年建築計画（模型図）

経営が逼迫していた武蔵工業大学を懇願され、継承した慶太（当時、東横学園理事長）は驚異的なスピードで改革を推し進めていく。1954年、武蔵工大理事長就任後、初出席した理事会では教室不足による校舎増築の議案が出された。年の瀬も押し迫った12月22日のことだ。建築学科蔵田周忠教授から提案があった。

蔵田「鉄筋平屋3教室の建築費300万円を、銀行から借りてほしい」。

慶太「僅か300万円のために私に保証人になれというのか？0が二つ足りないので

総合学園を目指し都市大発展の礎を築く

はないか？　3000万円なら納得できる。それに3教室増築では当座の間に合せでしかない。3000万円で鉄筋コンクリート3階建てにしようではないか」。

蔵田「鉄筋3階建ては願ってもない話だが、教室は来年4月に必要で、今からの計画では間に合わない。3000万円の負担は学校にとって相当な重荷になる」。

慶太「建設費は私が責任もつので、先生方は心配しなくてよい。設計施工が間に合わないなら東急でやる」。

蔵田「武蔵工大の名折れになるから設計は正月返上で間に合わせる」。

慶太「蔵田さんよく引き受けてくれた。それでは設計は1月15日までにお願いする。施工は私が4月末までに竣工するよう手配する」。

まさに慶太の面目躍如。ダイナミックな展望を是が非でも実現させる熱意と経営手腕を如実に物語るエピソードだ。

こうして武蔵工大には大学初の鉄筋コンクリート3階建て校舎が完成した。学生もようやく明るさと希望を取り戻した。慶太は矢継ぎ早に発展のプロセスを提示し、次々と改革に着手していく。まず、学長に招聘したのは、東工大学長、大阪大学総長、内閣技術院総裁、参議院議員を歴任し、八木アンテナの発明で有名な八木秀次博士だ。教授陣容も充実させ、教育環境を一変させた。また慶太は、教室棟、図書館・食堂棟、講堂、学生ホール、実験棟、本館棟などの10か年建築計画をたてた。慶太は計画から志半ば4年後に亡くなったが、子息の五島昇氏（東急電鉄社長、後に日本商工会議所会頭）がその遺志を引き継ぎ、同大学を飛躍的に発展させる起爆剤となった。

また慶太は大学振興策の目玉の一つとして、我が国の大学では近畿大学炉、立教大学炉につぐ第3基目の原子炉の設置（川崎市王禅寺）に踏み切る。1959年当時、建設費だけで約7億円だった。

1956年、慶太は経営難であった玉川正和行学園の経営も担っている。当時玉川用賀にあり、幼稚園、小学校、中学校、高校を擁していたが、この小学校が現在の都市大付属小学校の前身東横学園小学校になる。中学校の男子生徒はそのまま引き継がれ、付属中学校として用賀に誕生した。かくして武蔵工業大学は、慶太が念願していた幼稚園から大学に至る総合学園化への構想を着実に実現していく。

後に2009年4月1日、武蔵工業大学と東横学園女子短期大学の統合をもち、総合大学として東京都市大学グループの姿が完成する。奇しくも慶太の没後50年という節目の年であったが、その壮大な未来像はすでに1955年、五島育英会（武蔵工大と東横学園の両学校法人を合併）を創設した当時から慶太が鮮明に思い描き、宣言していたというのは驚くべきことである。

ご購読申し込みは●読売センター小諸TEL0267(41)6355●読売田中・滋野サービスセンターTEL0268(64)2362か東信ジャーナル社へ

五島慶太もう一つの顔 ⑤

五島育英会前顧問　國分　榮

やがて都市大付属となる塩尻高校は地元地域の強い要請から誕生した。慶太の教育にかける果てしない情熱の物語をここでもう一つ紹介したい。

1955年夏、長野県松本市の市会議長の中村戊子氏のもとへ、当時県内に存在しなかった無線技術者の養成学校設立が地元の有力者からたびたび提言された。中村氏は翌年、

塩尻市長が建立した五島慶太胸像

長野県に私学初の工業高校創立

塩尻町の役場隣の工場建物を校舎に改造し、開設準備を進めた。これが信州電波専門学校のはじまりである。同校は無線技術者と無線通信士の養成に向け、高卒の専門部と中卒の高等部を設置し、短期養成のテレビ科・ラジオ科を併設した。当初、入学志願者も137名と順調な滑り出しだったが、あばらや風の大部屋での授業で、2年目に入ると生徒は3分の1に減り、結局わずか1年たらずで経営が行き詰まった。そこで塩尻町長小松多喜雄氏は、法務大臣唐沢俊樹氏を通じて、長野県出身の慶太に白羽の矢を立て、経営再建を依頼した。慶太はこれを快諾し、継承1年後に、武蔵工業大学付属目黒高等無線学校の信州分校とし、武蔵工大学長の荒川大太郎氏を校長として兼務させ、支援体制を強化した。

そもそも本校に当たる付属目黒高等無線学校は、1956年、国立電気通信大学（目黒区）が調布に移転する際、当地の施設を譲り受け、無線通信・ラジオ・テレビ技術者養成学校として慶太が開設した。慶太は開校の挨拶で「私の畏友正力松太郎君が日本テレビ放送網株式会社を設立した時（1953年国内民間初のテレビ局、私はその事業は国家的事業であり、しかも将来性があるものと思い、率先協力を惜しまなかった。「私は前々からテレビ技術者の養成学校の設立を計画しておったのであるが、ここに開設するに至り、宿望を果し得たことは誠に欣快に堪えない」と、通信需要が旺盛かつ極度に高度化する時代、優秀な技術者養成が喫緊の課題だとその意欲を語っている。

その後、塩尻町は各種の大工場の誘致により人口も増大し、1959年、塩尻市に発展した。前述のとおり地元でも技術者の養成が急務として、官民合同の工業高校設置期成同盟会が結成され、塩尻市長が中心となり再三、慶太に工業高校の設置の陳情がなされた。目黒高等無線学校の信州分校は順調に前進していたが、慶太もさらなる躍進には工業高校への昇格が最善と判断。校地・校舎の拡充に新たな同市広丘高出地区を移転用地とし、本館校舎、講堂兼体育館、実験棟など、数期工事に分けた建築計画を立て、学校開設に向け尽力した。

残念ながら慶太は1959年他界したが、子息の五島昇氏がその遺志を継ぎ、1961年4月、山梨県教育長を歴任した田中哲雄氏を校長に任命し、機械科80名、電子科80名の規模でスタートした。

こうして長野県私学初の工業高校が塩尻市に誕生した。小松塩尻市長は、工業高校設立の謝意として、慶太の胸像を校舎計画4期目の落成日に寄贈した。その碑文には次のように記されている。

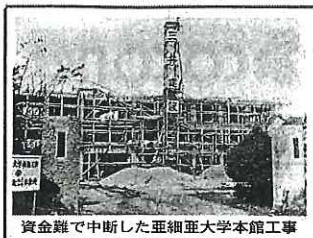
『五島慶太翁夙に育英に志あり』『本年全施設の完成するを記念して翁の頓徳を顕彰しこの像を建立する』

ご購読申し込みは●読売センター小諸℡0267(41)6355●読売田中・滋野サービスセンター℡0268(64)2362か東信ジャーナル社へ

五島慶太もう一つの顔 ⑥

五島育英会前顧問　國分　榮

東急教育事業グループの一翼を担うのが亜細亜大学である。近年、その使命たる国際性や本学独自のグローバル教育が評価されているが、その亜細亜学園は1941年に財団法人興亜協会が設立した興亜専門学校に端を発する。日本経済専門学校を経て、学制改革に伴い日本経済短期大学へと改称。



資金難で中断した亜細亜大学本館工事

1954年5月、文部大臣を歴任した太田耕造氏が理事長・学長に就任。経営科・貿易科に加え、中国留学生部を設置し、香港の留学生96名を受入れたのを契機に「亜細亜学園」と改めた。

太田学長は「アジアの国々と仲良くしないで、平和は来ない」「亜細亜という名前は、後に皆が欲しがる名前になる」と述べていたという(注一)。

太田氏は建学精神を「自助協力」として大学設置に奔走するが、ご多分に漏れず資金繰りに窮してしまう。学校債の発行などに加え、募金は、教職員が率先して応じ、教授会・職員会において給料から毎月五分の寄付を決議するなど努力を尽くすが、それでもなお資金調達は困難を極めた。大学設置の条件として、翌年3月までに主要な建物の完成を要したため、本館鉄筋コンクリート造3階建1660㎡の建築に着手するも、資金難で工事は何度も中断を余儀なくする。1955年5月、大学となって初の入学式を迎えたが、新設大学として知名度も低く、商学部商学科の入学者は41名であった。大学は松下幸之助氏など、名だたる財界の大物に働きかけたが、支援を受けることは叶わなかった。

亜細亜大学の発展をともに歩む

そこで太田学長は、故・岩田愛之助先生七回忌追悼会で出会った縁で慶太に支援を要請する。慶太はこれを快く引き受け、理事長に就任。早速、中断していた本館工事を再開させた。

慶太は、1957年の開学式・新館落成式の挨拶で「本学園の前途は、私が理事長に就任している五島育英会(現在の東京都市大学グループを運営)の各学校とともに、相寄り、相助け、近き将来には私の念願である『男女綜合学園』の一環を担っていただけるものと考えております」と、将来の総合大学への抱負を語った。

慶太はまた同年、五島育英会報創刊号発刊の辞で次のように述べている。「学校法人五島育英会は、発足以来息つく暇なく拡張を続け、正和行学園並びに大倉山学園の合併、二子幼稚園並びに東横学園女子短期大学(家政科)の設置によって、多年の念願である男女総合教育機関の樹立に第一歩を踏み出すと共に、校舎の増築、施設教材の整備によって幼稚園から大学迄男女一貫教育を行う学校として今日に至っている。又更には学校法人亜細亜学園と兄弟関係にあるので、亜細亜大学及び日本経済短期大学を加えるならば、五島育英会は正に綜合大学の形態をとり得るのであって、将来慶應、早稲田に匹敵し得る綜合大学になる日も遠くないと確信している」。

かくして五島育英会は、亜細亜大学の再出発以来1986年4月末までの30年間、理事会開催・用地確保・人事発令・財務等に至るいわゆる法人業務の委託を受け、同大学の発展をともに歩むことになる。

慶太の長男、五島昇氏(五島育英会元理事長)は、かつてこう振り返っている。

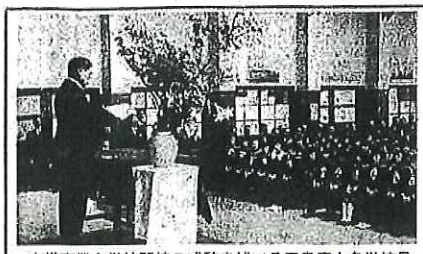
「亜細亜大学を五島育英会の傘下に入れる時の父の態度、あるいは、北海道開発に乗り出す時の気構えなどは、まさに一人の事業家というよりも、国に代って、利害を超えて、やり遂げねばならぬという国士的な気概をみせていた。父の最も頼もしく感じる時の姿である」(注二)。

注一・「平成三十年入学式」での大島正克学長挨拶

注二・「五島育英会報追悼号(学校法人五島育英会編)」に五島育英会理事長五島昇氏が寄稿

五島慶太もう一つの顔 ⑦

五島育英会前顧問　國分　榮



東横商業女学校開校の式辞を述べる五島慶太名誉校長

慶太は社内教育にも関心が高かった。19　37年4月、東京横浜電鉄と目黒蒲田電鉄（両社は現・東京急行電鉄）との折半で、社員向けに東横青年学校と東横家政女学校を目黒駅前電鉄本社跡に開設し、自ら初代校長となる。

両校とも当時の青年学校令に基づく学校制度で、小学校または高等小学校卒業後直ちに勤労に従事した青少年を対象にし、「心身を鍛錬し、徳性を養うとともに、実生活に必要な知識・技能を教える」いわば私立の定時制学校である。入学資格は、東京横浜電鉄・目黒蒲田電鉄・玉川電気鉄道および傍系会社に勤務する満14歳以上20歳までの勤労青少年であった。

慶太自ら私財を投じた学校創立

慶太は学校講堂で、新入社員に対し訓示を行った。自身が母校の青木村尋常高等小学校で代用教員を務めた後、英語科を卒業して英語教師になった経緯、鉄道省を経て実業界に転身した背景、財界不況の中、東横鉄道の経営難で自殺を考えるほど苦境に立たされた時代など、赤裸々に自らの半生を語り、若い社員たちに大きな感銘を与えた。

やがて慶太は私財を投じ、自らが理想とする学校を創り上げる。東横商業女学校（後の東横学園女子短期大学、現・都市大等々力中高の前身）である。

1934年、東京市長牛塚虎太郎氏の選挙費用を目蒲電鉄から10万円支出したとの誣告を受け、慶太は贈賄容疑により半年の獄中生活を市ケ谷で送ることとなる。この容疑は結局無罪となるが、検事局は会社から一切の帳簿を押収。慶應義塾大学に寄付した土地を買収として会計処理した手数料に目をつけ、文書偽造・横領として、慶太と支配人を起訴した。この疑獄事件は、一審では有罪、二審では無罪、大審院で上告棄却となり、4年目に青天白日の無罪となる。

実はこの時、慰謝金として株主総会の決議で電鉄から5万円が贈呈されるが、慶太は、学校のために起きた事件だから学校教育のために使いたいと決意。そこに私財12万円を加え、計17万円の資金で、1938年東横商業女学校を設立した。

東横商業女学校創立で慶太が掲げた理想は、「物事に即した教育、科学的な実践を通しての人格の陶冶であった。だから、初代の校長を選考するに当たっても学校経営に手腕のある数々の文科系出身の有力候補を採らず、初めから理科出身と云う事に限定して、遂に東京女高師より理科出身の吉田弘氏を招聘する事になった。この教職員採用方針は、小使いさんにまで及び、小使いさんの資格は単に掃除や、使い走り許りでなく、日常家庭に於ける大工の仕事でも、植木屋の仕事でも出来る人と云うむずかしい条件で採用された（注一）と当時の東横電鉄本社教育保険課長の西沢慶二郎氏は振り返る。

1938年、慶太は開校式の「時勢は如何なる女子を要求するか」と題する式辞で、女学生たちに向け、新しい時代にふさわしく活動的で自立した卒業生を輩出したいとその展望を語った。そのため、職業的な技能の習得にも力を注ぎ、珠算や当時では珍しかったタイプライターなどの実習もあった。理論や講義だけでなく、実践による習得に重点を置き、慶太の立場は名誉校長であったが、具体的な指示を与えるなど、自らも意欲的に現場に携わった。

慶太が情熱を燃やした人材育成の重要性について、東横商業女学校の第二代校長、三浅勇吉氏は次のように回顧した。

「教育こそ国家社会発展興隆の基礎である。樹を植えるのは十年の計、人を植えるは百年の大計であるという慶太の信念は、早期に始まり、そして先生の生涯を貫いていたものと信じます。事実、会社経営にあたられて、もっとも痛感されたのは、『人』を得ることであったのではないでしょうか」（注二）。

注一、二・「東横学園二〇年史」東横電鉄本社教育保険課長の西沢慶二郎氏及び東横商業女学校第二代校長三浅勇吉氏

ご購読申し込みは●読売センター小諸TEL0267(41)6355●読売田中・滋野サービスセンターTEL0268(64)2362か東信ジャーナル社へ

五島慶太もう一つの顔 ⑧

五島育英会前顧問　國分　榮

慶太が、東急グループにおける数多くの企業経営の傍ら、東横学園（現・都市大学）等々力中高）の創立者として、また、武蔵工業大学、亜細亜大学などの学校経営に直接携わったことをこの連載で述べてきた。企業家の枠を超えた教育への関心と情熱は、その元をただれば慶太の青年期の影響が大きい。

慶太は1882年4月18日、長野県小県郡青木村に生まれた。1900年3月、松本中学校を卒業後、上級学校へ進学したかったが、家の経済的事情もあり、同年4月、18歳で母校の青木村尋常高等小学校の代用教員となった。高等科3、4年の生徒に、地理・歴史、算術などを教え、その傍ら、上級学校への受験勉強を続け、苦学して、1902年4月、官費給費である東京高等師範学校（現・筑波大学）の英語科に進学し、卒業後の1905年4月には三重県立四日市商業学校の英語教師として赴任した。しかし志あって商業学校を辞めて上京、再び苦学して、東京帝国大学の法科大学政治学科に入学する。大学在学中は富井政章男爵（貴族院勅選議員・東京帝大名誉教授・法学者、加藤高明伯爵（イギリス大使・西園寺内閣外務大臣）といった、時の高官の子息の家庭教師を務め、両氏からも絶大な信頼を得た。

喜寿祝賀会における慶太翁

大学卒業後は文官試験に合格して農商務省に入り、その後鉄道院を経て、9年間の官吏生活後、実業界に転身。民間企業の武蔵電気鉄道（現・東京急行電鉄）などを次々合併して、大東急時代をつくり、文字通りの「私鉄王」となったのは特筆すべきだ。戦後、過度経済力集中排除法で解体につながった。

また、世間の注目を浴びた歴史のひとつに、地下鉄「浅草・新橋間」の早川徳次氏に、「渋谷・新橋」間の市民の利便性から相互乗り入れを慶太が提案した、いわゆる新橋駅をめぐる「地下鉄争奪戦」がある。いまや相互乗り入れも当たり前の時代だが、当時は大きな話題となった。さらに、百貨店「三越」の買収を画策して断念するも、「白木屋」（後の東急百貨店日本橋、跡地は現・コレド日本橋）の買収でも横井英樹氏と組んで、熾烈な戦いを繰り広げた。後に映画化された西武の堤康二郎氏との間で神奈川県箱根の観光事業をめぐる「箱根山戦争」は名高い。一方、民間主体の街づくりとして、国内最大規模を誇る東京西南部の多摩田園都市開発や、定山渓鉄道などバス事業統合による北海道開発に続き、晩年、最も力を入れた事業が、伊豆半島の開発と伊豆下田鉄道の建設だが、ここでも西武と対立した。慶太の足跡を辿ると、各業界にわたる逸話は枚挙にいとまがない。

こうして慶太のいかなるときも全力投球（東急）する姿勢は永久に衰えなかった。かつて慶太の薫陶を受けた吉次利一氏（東急車輛製造会長）が晩年の慶太との会話で次のように語っている。

伊豆の氷川峠に桜植え 30年後に花見を

「伊豆の氷川峠に東急が植林をやったときのことです。山を買って、植林をやる、その植林のやり手がない。結局僕に、『吉次君、ひとつ植林やってくれ』。要するに金を出して苗木を買ってきて山に木を植えればよい。だけど、われわれにしてみると、東急電鉄の仕事をしながら、あの伊豆の氷川峠に、製紙会社じゃあるまいし、ヒノキの苗木を植えたり、スギの苗木を植えたりするの、馬鹿ったらしく、やる気がしなかったので、なかなかやらなかった。『吉次君、なんとかやってくれよ。ヒノキとスギと、間に山桜を入れようよ。川の淵あたりに、ずーっと桜を植えようじゃないか。30年たったら、春、桜の咲くときに、酒もって山を散歩しようじゃないか』。会長、おかしいですなあ。30年たったら、私はもういませんよ（笑）。今55、6だから、30年たったら私はいませんよ。いわんや会長がいるはずない でしょうと言ったら、アハハと大笑いをしながら、『吉次君、歳はお互いに考えないことにしようよ。（笑）。しかし、そういう夢をもってもいいだろう』」（注）。

慶太は1959年8月14日、惜しまれつつ世を去った。終生夢を追い求めた77歳の生涯だった。生前の功績に対し正三位勲一等に叙せられ、瑞宝章が授与された。（連載終わり）

注・五島慶太翁遺訓研究会「第3集」東急車輛製造㈱会長吉次利二氏）

◇　◇

本連載文の登場した人物の一部は敬称を省略しました。

参考文献
学校法人五島育英会関係（五島慶太翁生誕130年記念誌「熱誠」、「五島育英会報」・「五島慶太先生追悼号」、「東横学園20年史」、「武蔵工業大学30年史」
東京急行電鉄株式会社関係（「五島慶太の追想」、「東京急行電鉄50年史」、社内誌「清和」）

（おわり）

ご購読申し込みは●読売センター小諸℡0267(41)6355●読売田中・滋野サービスセンター℡0268(64)2362か東信ジャーナル社へ